

【優 秀 賞】



氏 名 JAVIER SEAN GARY GUEVARRA
(ハビエル ショングアリゲバラ)

国・地域 アメリカ 

在日期間 1年5ヶ月

勤 務 先 曾於市（外国語指導助手）

タイトル ： 「あ、ガイジンだ！」

想像してほしい。数日前に日本に来た君は、買い物をしに行ったスーパーの隅でその言葉を聞いた。平気な顔で別のところに移動するけれど、心では「ガイジン」という言葉が鳴り響く。

君は一人だ。知り合いはほとんどいないし、日本語もあまり分からない。心は孤独や不安がいっぱいで、君の世界はとても暗くて狭い。

何か月か日本での生活を続けていくと、少しずつ友達ができ、新しい仲間たちが増えていく。町の小さなスナックに行けるようになったり、これまで食べられなかった和食が好きになったりして、いつの間にか町の一員になっていく。すると、君の世界はカラフルに輝き、心は幸福感でいっぱいだ。

だが、そんなある日、お店で食事をしていると、他のお客さんからこう声をかけられる。「お箸上手ですね。」笑顔で感謝を伝えはするが、鮮やかだった君の世界は一瞬で色を失い、初めて日本に来た時の自分に戻されてしまう。

こんな話は想像しにくいかもしれないが、僕たちガイジンにはよくあることだ。ほめ言葉なのに、何がいけないのかと、皆さんは混乱しているかもしれない。

正直に言うと、僕たちガイジンは、先程のような言葉をかけられたとき、人知れず「疎外感」を感じているのだ。

他にも、「日本語上手だね」とか「国はどこ」「いつ帰国するの」など…もしこれらの言葉をかけられたときに、毎回100円をもらえるとしたら、BMWの新車を買えるくらいは稼げることだろう。相手に「ありがとう」と伝えるけれど、「その言葉、日本人同士でも使うかな？」と思い、なんとも言えない寂しさからため息をつく。

一見、順調に交流が進んでいる中でも、疎外感は音もなく忍び寄って来る。

「やっぱり同じ仲間だと思われていないんだな…」「これじゃあまるで、子供扱いされているみたいだ…」そう感じながらも、なかなか口には出せない。なぜなら、その言葉に悪気がないのは分かっているから。僕たちだって、楽しい場の雰囲気を壊したくないから。

とはいえ、日本人に話しかけられたり、褒められたりすることは心の底から嬉しい。日本に住むために、ガイジンも一人一人方法は違うけれど、色々な勉強をし、日本の文化を学び、ルールを守るように頑張っている。

同じように日本人もまた、外国人を受け入れるために努力しているに違いない。皆さんも学校で他の教科と同じように、必死に英語を勉強してきたはずだ。それはとっても素晴らしいことだと思う。そして、習った英語を使って、外国人と素敵な友情を育んでいる。

モヤモヤした気持ちを抱えて日本で生活するのはもったいない。もっともっと日本を好きになりたい。もっともっと日本社会とも深く関わっていきたい。そう思って今日は、勇気を出して自分の本音を話す。外国人だから、見かけや言葉が違うからと言って特別扱いしないで欲しい。一人の人間として、仲間として、日本人の友達のように自然に接して欲しい。それが叶ったとき、僕たちの心の霧は晴れ、もっとリアルで素晴らしい交流が出来ると信じている。

僕は日本が好きだ。大好きだ。将来の夢は日本に住んで、日本人と結婚して、家族を作ることだ。他の外国人もきっと同じような夢を持っているだろう。そんな外国人にとって「疎外感」は大きな壁になっている。それを壊すことが出来たら、僕たち外国人は、日本のためにもっと貢献できるのではないだろうか。

日本に住んでいる外国人が日本人と共にスムーズに暮らせるだけでなく、経済や社会にも影響を与えられるはずだ。そのような社会を実現させるために、外国人を特別扱いせず、普通の友達のように接してほしい。

千里の道も一歩から、一緒に、その一歩を踏み出そう。